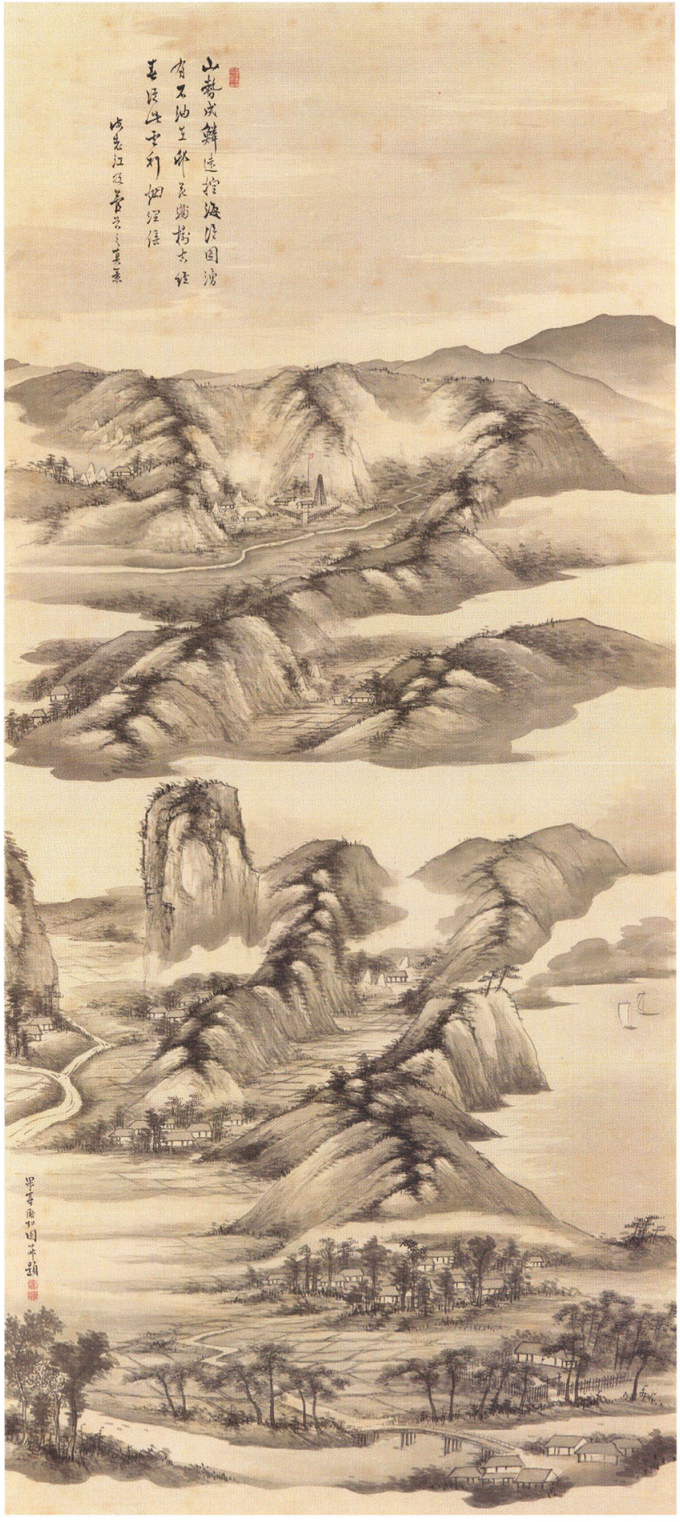
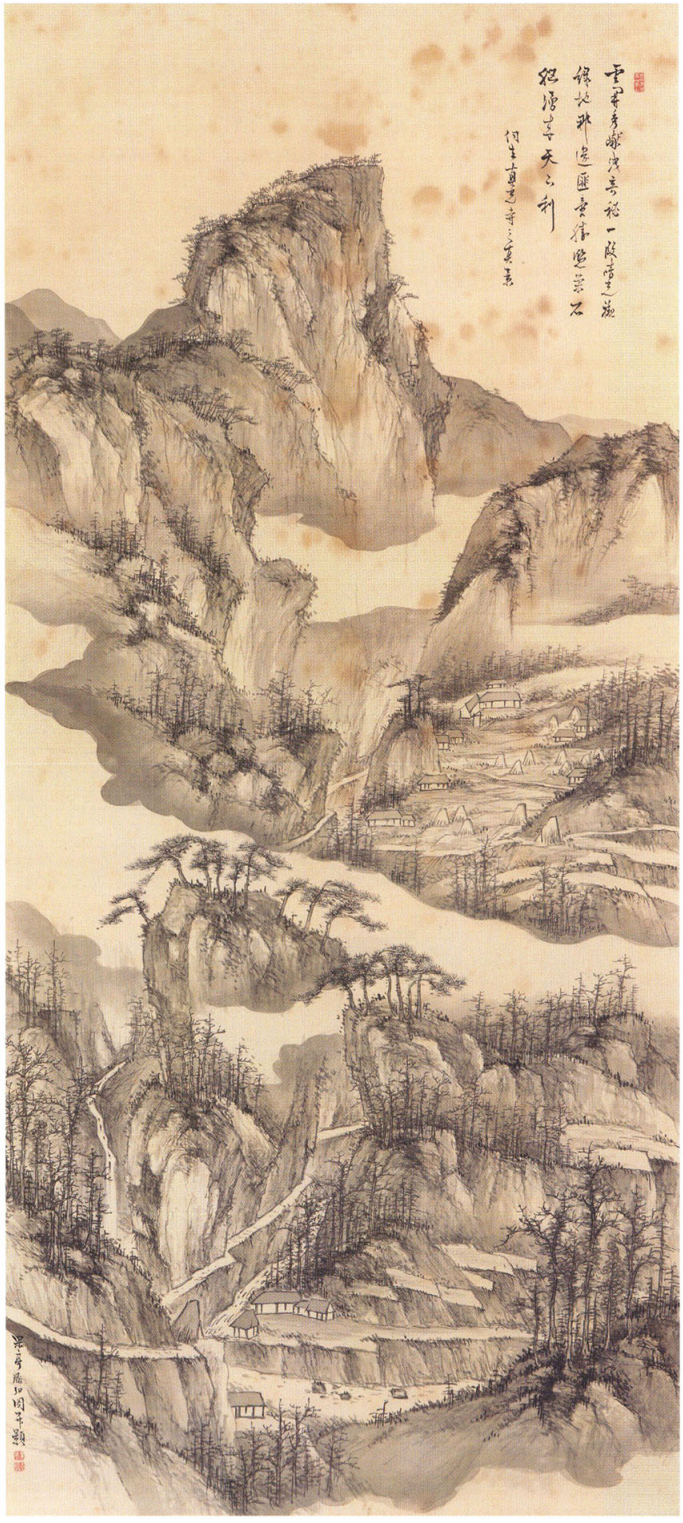


茂菅及鑢之真景



伺去真光寺之真景

海老江及菅谷之真景

26　石脳油産地之真景　児玉果亭

三幅対

明治時代中後期（十九～二十世紀）
絹本墨画
各一四五・七×六四・六

作者の児玉果亭（一八四一～一九一三）は、信濃国（長野県）下高井郡平穏村渋温泉に生まれる。名は道弘、のちに丑松。字は士毅。はじめ飯山藩の佐久間雲窓に南画を学び、後に京都に出て田能村直入に師事する。明治十三年（一八八〇）に帰郷すると画室をひらき、以降世間的な評価を求めることなく郷里で作画活動を続けた。

本図は、果亭と同じく信濃の出身で、明治四年に日本初の石油会社である長野石炭油会社（翌年、長野石油会社に改称）を設立した石坂周造より献上された作品。題名の石脳油とは石油のことであり、三幅対に漢詩をともなって描かれる地は、それぞれ信濃国水内郡伺去真光寺村、同じく水内郡鑢村および茂菅村、そして遠江国（静岡県）榛原郡海老江村および菅ヶ谷村という、いずれも原油の産出地として知られ長野石油会社が採掘を行っていた土地である。描かれた図に目をこらせば、その採掘を行うために石坂が日本国内で初めて導入した綱式掘削機の櫓の姿も認められる。こうした描写は実景写生をもとにしたと思われるが、懸崖が縦へ縦へと積み重なっていく俯瞰の構図は独創的であり、ほぼ墨一色で表現された幽境を思わせる静謐な画面空間は、中央画壇を離れて郷里で脱俗の境地にいたった果亭の理想が反映されているように思われる。現実の風景をみて胸中に湧いた画想をその実景に託して描く、江戸時代後期の文人画家らが生み出した真景図の伝統は、こうして近代においても受け継がれていたと言えよう。果亭はこの他にも信濃の各地の真景図を残している。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

名所絵から風景画へ――情景との対話

三の丸尚蔵館展覧会図録No.76

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成二十九年三月二十五日発行

© 2017, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan